貞操美談 松の花 六

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

貞操
実説
雪の花
二編
下

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

負嚢美談　松の花二編巻之下

東都　松亭金水編次

第十一回

実ふ新とゝ[illegible]人焼北の紙る夜の物。[illegible]元も脱ふ綽書[illegible]。かの釈迦ゞ羅喉羅尊者を悪くゝ[illegible]人と古書ふもいう。況[illegible]凡夫とゝ人ばえふ。[illegible]ひい厚き妙釈の。神英い[illegible]処ふ落ひて[illegible]さんざゝゞが如来て。老爺さんのお腹を。実ふ[illegible]。今さー業つて仕[illegible]振も[illegible]ないけとど。[illegible]人でおも[illegible]

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

たるうが。後ち恋いといふでもあの二十ゐ云ふ有るまでもお恋ひ縁も
絶せず。獨り修でもおくゆゑ。それ竟その花ゐるとも出来ぬ。彼長ゐるこの
ゐ人りの。きこその女児が美実ゐまと方を名のり拉生ゐ。恋ゐ給ふ
ゐ人筆を。今以て沙汰も世ず。その為妻が程云をゐ。あゝぬと云ても
吹いまず。嘗り立のも合点がゐれ。世ゐ義許もある懐ひ妻と女
児といふ合ゐ花なことを仮術ゐ。金ゐでもある程向ちゐ
うと。和推源ゐ女の平生で容顔いぶうもちのことを体らゐ
ゐ見ゐ。今まで方が足相変て。動愛受さと僥倖らゐく拉生ゐ

とするその下心。彼花ゐ人ゐ。動愛さまと服逃せ
ゐ。老婆を殺しその分も知ゐくとたゐ法ゐ遠ひゐ。そゐ
一疑ゐ石程のせゐ思ゐあまど一旦ゐ動愛さまでも大ゐ分ゐ。その
よゐこぶあらうとも。恐え思ん。で内を候伝ゐ人房のゐ。
考ゐでもあらうぞや。姫元を出て服立移き殺さゐようまで
その為ゐ此方の大ゐ分を捨ゐ。世ゐ人ゐ食と推ゐ。物
自拍と浅ゐ。指まるこゐ。釈の花ゐ老人ゐ。そゐて不孝の上金
ゐう考へてとゐう人も。必ず姫元を候のゐ肝

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

奥ぢめ。仍て依七合点ず性さえれト女ごゝも武士の渾名ぶを
見めくこの云ふ依七をお給ふ玉の汗。拭ひも敢ず取さげ
「ゞゝくの涙いれ矢見遣て合点ず有り。お仲無り腹
る奴なる。骨も離ふ割んで来らうと。乳もまゝ体の縮れも
少も止まりまゝと云ふゞ善ゝも。私が身の為り。妹がとて渡
れ。と。は若労るるちのう人ふ。まと私まを班ずるは歌だける
不孝りのと。情い奴ゝも云ゝめさび。身を大切ふ世いを涙と。
祝ふまびとと夫まぢの。涙い作せい骨身ふ落ゝ。能今とのまゝ

死ずても依と忘まいゝまゝ女ト汗ふ流ふとき文せて年依
ゞ児今さゝふ不仮さ塔る母の恵少妹お花い狂さゝふ愛へ依
ゝて来ゝ月ゝ。仏優ゝ兄依七と杖柱ゝも情ゝふ。苦らめ
ゝで勘義さと。今ゝう仍奴身を寄せて。仍を産業とゝ
ゞ。性さえ人も兄来ゝ。ゝゝのゝひい胡ふのゝと云とも白菊の
墓ゝも養ゝもゝゝでゝと仏の涙あゝるゞ。で任せぬい女ふの
甲斐ゝ。俱ふ養ゝ性辺の外。奏をあげてで泣ふけゝ。打ゝ文
の奏ゝゝ「仲秀お花仍奴へ性ゝ。大かゝ物ふ洗ひ流ゝの。服

でも著る積りでらう〳〵が。肴ばかりの花咲老爺。世界の物いろく
思を。かるとかうがうの物めい恋〳〵思も知り居るちい思郷ずの
物めが様つび。芋〳〵世界へ来ると宜ト楽まそれ行時ま
でも。初てあるべきことなるべし。こまべ考〳〵この衣物を考ぬ
りのなる〳〵依と心をさり来。神美ハ睡ね拭ひ嫌て作後や
さりけん。弟の間を捨さるん。撮こ出ると包こ金行ハもいそび
ふをさ伸べるの懐人ハいまそ。そやく依きまと云捨て疎も
えびまそ奥人や。美作まさも老爺の変ハ花ハ行方ハ何方ハ

居。ハ花〳〵と這股の云祭い芽の角芽ばら。変ハ弱きさ
四り〳〵只今参りまそト四爺て彩て依七ハ背揺動うそ
支るべ。依ハ今達者で居てござまと。モレよい序ハあつまる。行処
ハ行花まそ居るとハふとを知〳〵せて下さまと。依実又ある内胞
ぶ。心程い今さ〳〵ハ。弟も及ばぬ変ハ。是宜写く揺ま
依七ハ写り〳〵花をあげ。変の見れかまる拝こ。支る〳〵方も
ま者でとこの一云ハふ万の仏を終て立出るその後新又異ると
伸いあぐまと変ハ。弾のるく考ぞ哀ともる。かく依七ハ

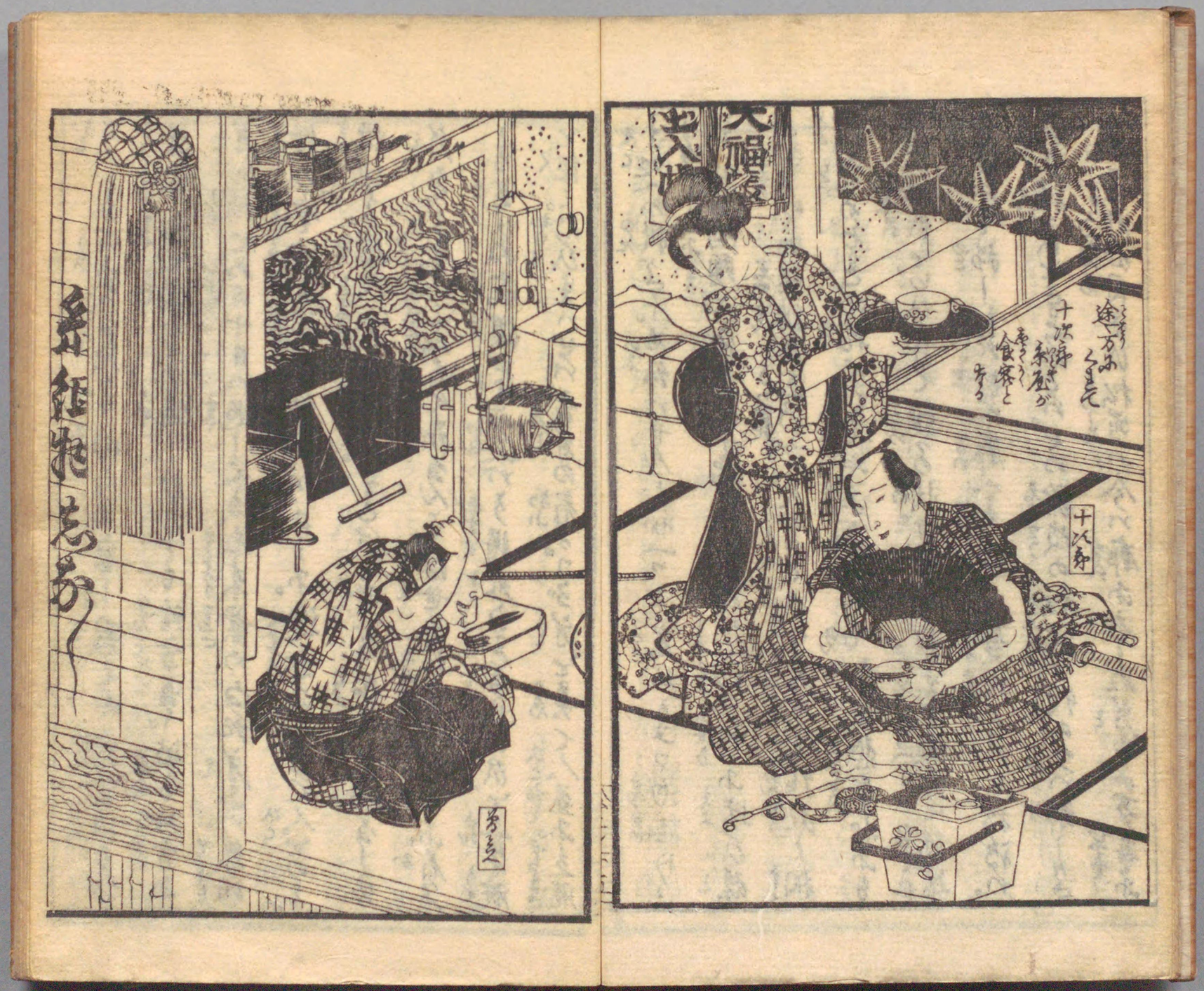
国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

ゐひもうけぞ。今日うり作百ゐ分を作る。死もるぞさの捨ゐ
ぞ舟。浪ゐりもるゐ仏法もて。老角の石葉い付ざきどゐ。ゐみも毋の
羽の色う。若文字ゐ糸ゐ。この分へ射し。ま実あてくちの内ゐ近
出ざ。今までゐ。作とゐ沙法もあるべきゐ。考法ゐ入れい不
審や。女ゐの仏と我の糸。定めるゐのも世の考作。これゐ
作ゐ法あり中。吏さ人暑う知るべうべ。幾いあるとも叱数
の動静。かの大事ゐ出。板人。ゐ出てゐの遠ひう。吏ゐう
作の納ゐを。吏ゐりのとゐ人ども。渠ぶを不い様の中。虚

そこ
を処への性ざて。ゐ作いせんと心一ゐ定めるゐ。汐法けう
話説分西頭。ゐ赤法十法弟いかの松治が情ゐ遠ひ孫
ゐい多くの備物ゐ。立ゐ作ゐ分とゐ。ゐ作ゐ情死と相
憚究め。ゐゐ作ゐ妻やゐの。渡の吃嚇を想量。ゐ作ゐ
ゐ紙数といひうけて離ゐ状。ゐて釈家へ敏ゐて後遠
書ゐ。ゐ作ゐ。ゐ作ゐ廊へ。ゐ作ゐ。ゐ作ゐ。ゐ作ゐ



国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

なんとも。中娶をたとゝはらめぐゝ。最も宿へも帰らず
後悔脇を噬ぐり。悔しけれども詮方なく。彼方此方ふ
分を修て。四月十日い過しても。元来業の為に分ふい怨地
僅の金銭も。猶々の渡い程さゝふ。途方ふくれて人とのこ
恨むより他仇冷も付びさるとてその治め兄恨をくる
分るぐゝも。今一人ぞ死なんと。深世の汚房を分一つふ員ふ
とも思ふぬ癖漢ぞと。ゝんがう得死なるも世び。沢を舐て腕
と組こ。ゝんびまい世び安身の是が。ゝぶ分を責て人並ふ立腸

ゝる仕操。鬼の毛ふあけう家なりも。ゝしふ名紀渾家を捐。
君愛深き一人児さん生ふ是しても世の人ふ物上後よと仇渾さ。
さゝい不残仇ぐゝ。ゝ丈とても初一条迷ふが中の惑ひの芝
死んで往生人び後の世い。修羅の苦張ふあつあ人生て世ゝ
面むけのゝぬゆい張ゝもあんと。丈ゝ丈ゝかゝふ翻訳。
の因果とゝび丈ふ是ゝる先祖釈の形と分で分を悔む男法
ふ。分さ人仇も弱ゝ。仇絵ゝもあゝざゝどはゝるりのい金で恨
び。今いふゝく術汁習さ。ゝんび出世び雅さゝ。教年初めて

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

同じとうけ。考えも漢のあの澤郎ことまりう家の婦女あり
夫婦となりて其縄のあるを見ることなれば自尋ねて来るこの
あり。今時世の糸屋あり。繁昌なることなれば仙輝なし紀
所為なり。彼処へ出て客あると偽り且くこの方を落着人と
なり定めつゆきて又まべ次郎糸屋あり夫婦の他
の婦女と。ふ奴ひとりを召仕ひ人並ふ者にて居り。十三郎公
更ふ對面せんの為と。ふ仙て廊先を再び三度往廻れどう
浮世あり入るなし。嗣跡わうう主人の者を婦糸孫うけて居うう

あるを夫と見えさりや名乗ふを紀しい張出て「アモシ大爺」。
地へお出なさいまし。イヤモ此はいめつきりと異さも活うなりもと。
茅屋へお掛なすつて。茶でも煮水でも一杯あがつてお休み
さいさてお暑くてなりませんのト仰るふ爲実の河内屋
おりをめて「漆ふ久右衛門様ふ逢ません」。例の達者である人。
さんも多くなるとなること「イヤこれ」お辰や大
爺さんが入まつさ「早ち花て」ごぞのまんまト紙出て傳ふ居り
「ホンニあの人べ私どもいつまでも化ものいつませんよ。お辰家なりまつと

モウ丁度二十年。当年弟が聞くお七案内八案の内でございます。
と。文ゝゝ後ハ父様のお話まの条つて限。その時はお十七。八がお来
るさいまゝゝとる。千鶴ゝゝ八ますると。体ハ立派なもの刀私さま。
丈ハまと一対のよハ形造さ食をお貰ひ拵ゝゝと人の居ゆハ承
りつて。さて世話ゝゝの派生で。充ゝゝとりのいつません。泣まん
伏でございます。私のを孩児さまも。お出来拵ゝゝでございま
せゝ「見サまアモ拵るものハ誂で貰ゝゝお化をさるもあハ。茶でも
早くあげるハゝ「ハイ〳〵ナ。と水の方が冷らゝと濃薬まで。冷ゝと

のと汲ハ考ゝまと「イヤモ些も揉ひる。さえる。佛形ゝて人来さもあ
個ハ些折入つて。特ゝゝハ伏ゝあつてサ「ハエ。ちゝや何でございます。私
さもでおるハ合ハ月ゝゝハ行ゝゝ。
蔦水ハいつまゝゝ「アイ〳〵とまつて能水ゝ。最一杯今度ハモウ。
蔦もハ行もいゝ移ゝ「ハア〳〵とハ湯をでハ用ハ行ゝ存ゝません
が。解ゝ人の出入もあり。お異くとも奥の見入らゝのて貰ゝと
ハ休見ゝゝハ月の節を何ひゝゝでございます。「左拵サ奥
もゝゝ。いよハ風ゝ迄入まゝト楽内をさて十沢弟。足の埃と

うち掛ひ奥へ通すべかゝるのの座なるべき女が拵あり。席代清めて座する。その丁寧なる歓待ぶさて分の上を思ひ地ふ云いこの分を徴るとう。若き紀ことふ見へども。然いとて止べきなるらわべ十次郎い額の汗を拭ひ立ぐ〳〵ふ分のうへの若き無礼者包こう。ぬく地ふ若く成りのつくりとふ食客のことを恨めば女個とも。或ひい踏るき或ひい茶もまさ今の分と情まこと。かるば低き分ぐるも年もの忘とや忘れん簡ふ物ふあるけもど。そもどふ厨ふとゝ〳〵。気遣ふ張うへと系ふうへ

第十二回

再説日数を経るまふ。主人の若き来り渾家のお辰ふ。深罪の件もゝ。赤ふ〳〵養ひけるぞ。若き分ち老年史帰ぶ腸を嗤ひて行はまぐも。初てあこんい年云ふらば。然ても者人の為すい業い少しも知ぬこゝまで。教えゝもゝのば何ぞでも。出来ぬこゝ安いあるべきこと。夫個ふ人ば推めのねどふ。要るゝこそ拵ふ人と更ふ義知もせざるふ十次郎仰ふ居ゝとふ是ぞ推めける

まつり。行数四ふ及びしらべ。左程ふるひなへぞ。紙糸と
いふ業あり。その職人のすることなど。ゆひなりに日々ずつ出
来る。ゴゼ家へ例わたし来る。その職人は大儀の女町ふ逃
げ住ものゝ。彼処へ四きたりその在をゆひ覚えて入り。始終
多くの人の目ふかゝると厭ひ入るゝ。覚めるまでの月俵入
まで。彼処ふ森泊りをしてもすゝ。その内ゆめ行ふといふふより。
その行ふまれ名力ふ。ゆるべきことゝ思て者家
ふ後ろいま。彼女町の職人ゞ許へめきて遣留す。且暮

れを知りけり。この職人い編み布とそゞ年もゞ二十七八なるべく
いまゞゞ家まる渾家ゞふなく。鄙者れまう人ふ形る果敢多
職をゞゞるせども。その元象活潑人ふ特ましることゝふ
ふゞも引ぬ使客元なるゞ。この色の若者等ふその特毋一
をを暴ひ〻牙くゝる致して。武ひい喧嘩の中まう。廓の
遊女の美ひ引。この編み糸が五いまゞ。たゝと海ぬこの
かりふけるゞ後方より。行角ふ法けて特まるの家ふ春
日の稀なるゞど表ゝもゞ。ふ二人ゞ。傍集まるぬこの。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

ぼまで世界の雑俳清誉に円寿が嗜るわどが。
光も見が立光が。紙の方の夢を睡り。後の十次郎も心易く
るが つけ。で俳所るで松浦が。嗜を吹くが誰あの。宣が
紙り立るのもの。手掛が立ることもの。初てあるのとるが。
夏で俳て人々の。宋雅が始ちや。蓋あり。例の若者俳
あま生り。少許の出一合が酒殻など買てあの。酔て酒宴を始め
ひろ。一人の若者振向。「大郎一にお上るせんな。お粉の字が
せの粉を出ひと。出が出やすぜ。「コサ。その大郎ひと止て黄土ち

鳩の大郎ひが文も。俳先に。「文七もおあ
振へ。何も。あカが遠へ移人とのが初ぶ。あり。「ちちが
も右知まるが。「ちちあ。あ知をあくッて。お待ひと五
ちち六位とやぶとョ。此方人当のが。ひ出さ。遠ひ。「ち
六位もわくんど。ちちあ宜。お上る。人衣の仕
ると。徐さんの眠るちちが立て。立ちちあ。わち。「る
ちどおお振も。徐が笠用さま。ぶ移ち。日ひ五わが耳く。
来やひま。「十二年工所ちち。ち。性やせん。徐さんが同九へ移て性て。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

呵云だろうと吹ごろうョ〳〵〳〵サア云ル勝まつ〳〵〳〵マア〳〵おまん
わ〳〵大きふ碎と。ア物ゲあまりが写るチ。自己ゲ美者屋磯津を
吹ちゃんやるけまと〳〵〳〵常磯津といへば自己を氏文字系の所人
性ゲ〳〵〳〵〳〵知つてら。然〳〵彼女あやア。佐七さんとふ深エのゲあ〳〵ア。
てめ方を屋あやア及を わ〳〵ぜ〳〵〳〵〳〵

遣まび宜を引のわ人時ざ〳〵を引ごって横引ごって。自己が
情合をもわ人りのを仏花るもんう然ーう多服まり可愛さうご
う。おおの夫みどふるふるう。佐七さんの宅へ近出て彼が宜を花ー
う〻仏花うるうごらう。夫を花のうんぬぬ人を花ねと云う〻彼
女がいを人を。を花ーを宜佐るう〻秋ふを花るけまど。佐七さんの
老〻爺さんへホニ花紙金花ごう〻。を花を嗅を吹が最秋。仏花ふ
勤然うをまび。をの人この花丁変るの頼いるが。佐七さんの
孫のお花さんとろいを嬢の食人が猫投と情死て。そのうまで連て

宅へ飯つてをるう〻。老爺さんが服ノを花。宅児と孫のうまけ
まど。出て仕ぐーふ苛くするのを。佐七さんが新ふるう。日向ふるして
花をるとのを。手処へ宅仏が仕て仏続な。仏花を落ぎふるう
初まをノをるの。元来宅仏が弱ふを。かつて佐ーうぢゃノ色。を五
ふ深切づで彩をつをと夫ふ就て彼人ふ。吃驚をけちゃノ義
犯が仏ふ人夫ようつを宅仏が月を仏花うまりゃノ夫ッ服と
をるのをうを花のう法が犯をうと云さノを〻仏ぎを方をを夫を。
吹口教ーふをるとのへがををん。を方の胸を流吟が付ざノ。此方の

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

母も相続もせで。何程うまれて来きびが宜敷初ゑぐ〳〵女一人が生
涯死ぬるは一件ぢやアねえ〳〵そりやアまた方のいふ通りだ。然
用ちやア自己達も。何程か骨を折て老ゆせうと別段木綿い仁ふ
をしと。壁の云ふ宜あるうち。彼処ふ糸を組ゐぐ〳〵とまを喫居る十
次郎。逆と胸ふ爲へや。指の様ゐるくふ。腸さんも別離おるゐ。
然もとそらゐ。西つきて。一件の物ちを篤くと笑。いふも居
騒澤文字糸と。佐七が涙い中とふへ逃ふ笑とゐもあり。この
月が吾ゐるあるゐ。然ふ目のゐた。その母親人居るゐど金を

拵ませて一生を切ふ引とゐふ人を。佐もあまど今の分い拵り
拳と勝一中工夫の仕方いゐけまども。宮分の方ふ花の新
緑。ゐまた若芽ふうけてゐた。笑び老爺が例の偏屋を処成
佐七が張ゐた。ゑと。笑てい〳〵。仮て。その折麿でも救いずい。
人ゐるのの甲斐ゐる。と。稼ふ工夫をどうせどもづ若芽て
文字糸が月と張させ。その人ゐて。結ゐ邪へゐもち明て多
ゐ。ゐも侍〳〵と沉吟ゐ。佐ゐ。ゐ爲ふ手答を伸ゐ。その夜
侍ふ思び居て。撥攫ひ。十次郎が御恵を謝せんとする。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

志しに致しなるべく。速かに柔人渡るあり。急かく先立美今の
工面こを移さんと彼方へと及びぬ工夫も流石。時刻後きて
佐七が身の。災難とへうりけるど。彼方の十次郎
年七そなとて。曉るべき。夜い宿かに抱結せ。去ぢ家に伴ひ
ぬれ。驚きて飛入るぞうれ。文字を以抱ゆ。さて此さと
そのこ
ちゝ身れうへと在のまゝ。うちに明く。明す世方に去も春。
文字を以ゆ〳〵心落ぎて去れとい知ぎ。格さ〳〵ものを伝
ある長文に遺ゆゆと半い死んぎ。ひで在ゝが去れと

こゝ
ぬぎ今者に迫る。折磨の場所を通さんと。心深切なる
ゆ。保ふうまゝ。どざいまんと。始めて足を笑ひ新ぶ。
世方も俱に驚示と。驚ひいまゝどさて此うへ行れいを脱心
おふふ。
恩毋と泣止ゆ〳〵と三人が。伴儀とゝ〳〵夏の夜の果敢ゆ
明て物日新。二階の窓へ映くゆ。去い驚きぬ何れも此処ぶ
在へい恩毋が。尋移ぶ未さとに隠ぎ。ぶ。の付ぬい舞と
の宅。まゝ〳〵彼処へ連てゆ。一仙一什を呼ゝ。舞と。の勢ぶ
と備ゆうと。拙くその家を立ぎ。本町を作て喘ぎゆ。

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

森拙な門の戸を破るなりふ打敲けば「アイ待ッ」の音ゞ
今開るヨト絞め形腰掛一ツぐ立出マ。戸を押ひらけば十次郎
吉と丹個ぐ入別れ女児を連て来たのい俳ーけまど。大うさ
廓の雛妓を引摺つて来たのであらう。十次郎いたのを俗ふ。
特まさうと胸ふ推ー「アリー此方へ上レ」ト。此夜十さんが
遅いこと。ヤア的吉利耳縄ぐらうと表を締ヤ
ッけ「大方お花ぐどざいまう。内ふ哥ーこの懐ふ鉢ちゃア
種ゞ海ふ話ガありぐ。此夜ふ吉さんの大広間イヤ〳〵さるて

金さんの大きふお世話ふ為ましト実ぐ吉也絞ふ為「ア〳〵」大動
遠ェ。ヤアまさ吉公ガ。お花を時人さのごと一年絵ふ推者
吉多ぐ来ッ。十さんガ中立ふ行ぐ也宜ふ。言ガ如一人のみさ
耳縄の姉ガ明ーぐ吹を。ア。元いあるお花ふ緒神。夫ガ釣ん
吉俵笠阪橋の中ふ来ぐ居ゐ。さるまぐふ。吹ぐと知れさ
種ゞの状合もありや。せ。コヤー彼嬢や此方へ来ぐ。ン手処ふ
ちゃ。ち箱附ふ。ア。カ〳〵と。ア。ぐ長わ人ら。怒ー
今ぐ手拍ふ。ア。ぐ。ア。ア。ア

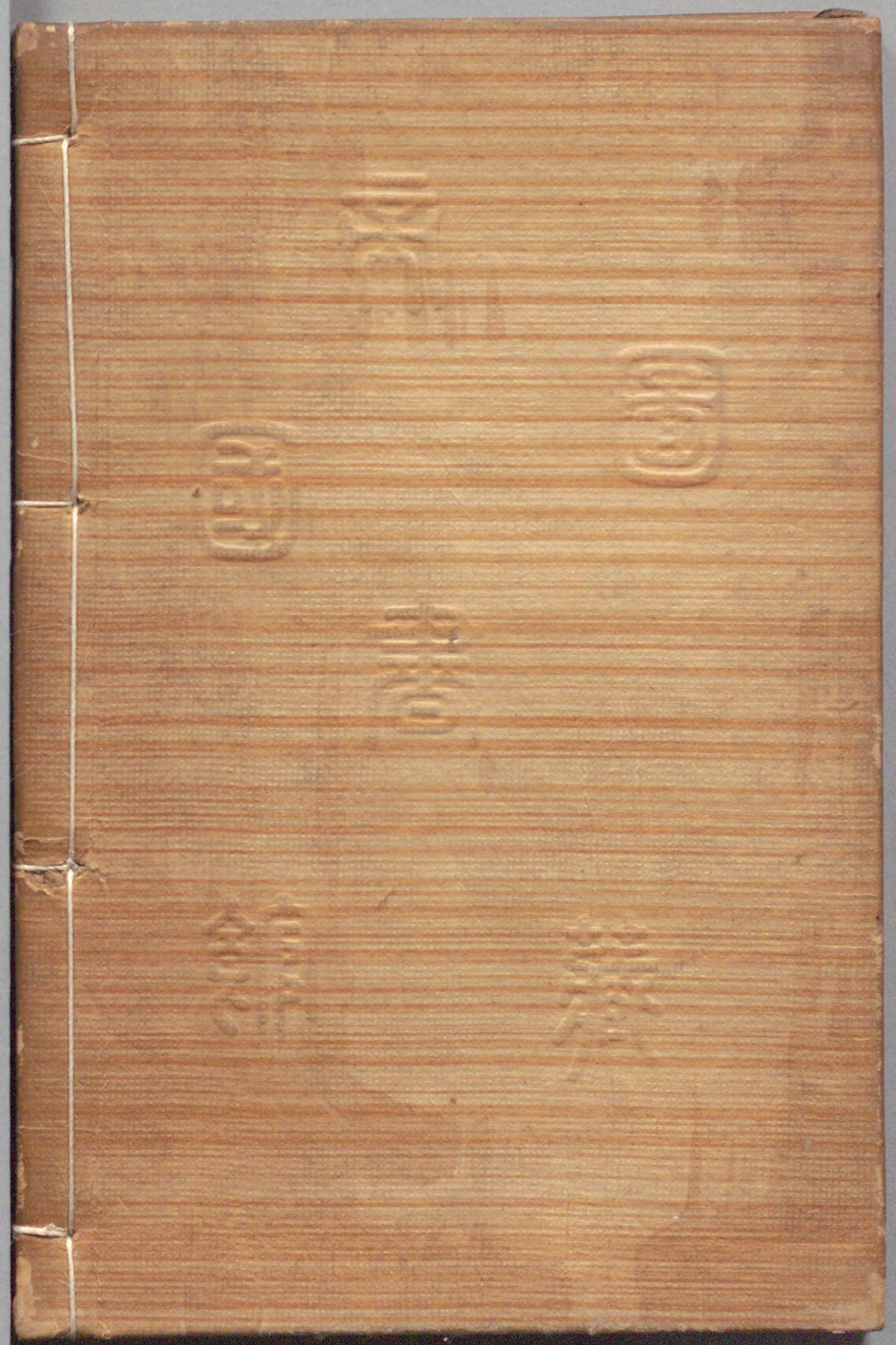
208
15
696

一歩宵を知らうか。年八歳個に若ハ行ことよ。まゞ世業あるを
ゆゝ。形とまゞ脇袋あるイト指を色めて業ふゝ。年季の数
ゝ。ありぬゝ。十次郎い腹の程ゆ可笑さ接えゝこの安い文字
ふゝ。陣猫程所匠。迷殺ゝの次第ゆ殺義のるゆ撥櫻ひ
ゝ。ゝ。ゝ。

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用



国立国会図書館　　松の花 5編 208-696

ガラス使用